

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第140号 2026年8月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1

近畿大学教職教育部 富岡研究室

e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム アメリカのエリート女子大の建築と教育	加藤 善子	2
金子昇・大東文化学園第5代理事長の回顧談 — 創設20周年に際し父兄会に感謝を捧ぐ(1982年) —	谷本 宗生	4
女子教育史散策・昭和戦時下編(89) 共立女子学園の場合5	長本 裕子	7
進学案内書にみる戦前期東京の予備校(28): 『一目瞭然東京遊学学校案内』『一目瞭然東京遊学学校案内』(大正13年)(大正14年)(大正15年)	吉野 剛弘	16
刊行要項(2026年2月15日現在)		21
短評・文献紹介 アニメキャラクターの輪堂凜(HIGHSPEED Étoile、第2話) について(谷本宗生)、『伊勢と皇學館の140年』について(富岡勝)		22
会員消息 谷本宗生、山本剛、富岡勝		23

コラム

アメリカのエリート女子大の建築と教育

かとう よしこ
加藤 善子

(信州大学)

アメリカの名門女子大学
—19世紀に創設された7大学
を総称してセブン・シスターズと
呼ばれる—を研究することにな
りました (JSPS 科 研 費
26H01973「戦前期の都市空

間における女性高等教育の拠点形成に関する比較歴史社会学研究」研究代表者:大前敦巳)。研究会で宿題をもらい、Helen Lefkowitz Horowitz, 1993. *Alma Mater: Design and Experience in the Women's Colleges from Their Nineteenth-Century Beginnings to the 1930, Second Edition* を発表のために読みました (大変でしたが、面白さがわかってきました…!)。

最初期の数校の創設者たちは、女性を管理し、女性性を守る意図をもってキャンパスや建物をデザインしたものの、その環境で生活し教育を受けた当の女性たちは、創設者の意図を越えて独自の文化をつくり、自律性を獲得していった、という経緯がこの本ではダイナミックに描かれています。初期の女子大学の校舎は、巨大な建物が一つだけで、出入口は一か所しかなく、その中ですべてが完結するようになっていました。教室も、図書室も、実験室も、女性教師と学生の居住区域も、チャペルも、すべてが一つの建物の中に納められ、女性教師は常に学生を監視監督する義務を負っていました (男性教師に学生監督義務はなく、キャンパス外に居住していた)。ハーバードやアマーストなどの大学 (男子学生のみ) は、目的別の建物がキャンパスのあちこちに複数建てられていました。表向きには厳格な規則はあったにせよ、監視の届かない空間で、男子学生は自由を享受していたことと対照的で、衝撃を受けました。

1900年前後に、経済的に豊かな階層の学生が入学してくるにつれ、学生たちは禁欲的な生活に異議を申し立て、華やかな学生文化が花開いていきます。学生だけの建物—学生寮も獲得します。女性教師も自分たちの地位の向上や自律性を求めるようになっていきます。女性教師たちは、昇給や地位向上を求め

て運動し(ちょうど女性参政権運動の時期と重なっている)、やがてキャンパス外に住むようになっていきます。増加する学生に対応するべく、経営陣も創立時の理念—女性を外社会から隔離し厳格に監視監督することで女性性を守る—と決別し、異なる建築様式を採用するようになっていきました。

最初からすべて男子大学と同様の建築様式でつくられたのがプリンマー大学です(津田梅子が学んだことで有名)。四つの建物で中庭を四角に囲むように配置するもので(Quadrangle)、ケンブリッジやオックスフォード大学の古典的な大学建築を採用した初の女子大学でした。プリンマー大学の教育はジョンズ・ホプキンス大学をモデルにして、ドイツで研鑽を積んだ教授陣を招聘し、大学院(博士課程)も設立当初から設置したのです。

興味深かったのは、世紀の変わり目に女性教師が自律性を獲得し、専門職としての地位を築いていく闘いの歴史でした。学生を監督する生活では、女性教師は研究時間を確保することができず、キャンパスの外に家を借りて住めるだけの給料も払われていませんでした。研究評価は男性教員に対してのみ行われており、男性教員がProfessorと呼ばれていたのに対し、女性教師はTeacherでした。教授会に参加する資格もなかったのです。

もう一点は、自然科学系が充実したりベラルアーツカリキュラムです(創立当初からラボがある)。アメリカの女子大出身者は、共学出身の女性よりもWho's Whoなどの人名録に採録される割合が2倍だそうです。たとえば神戸女学院は、セブン・シスターズをモデルにしてキャンパスや教育課程を準備したそうですが(セブン・シスターズ出身の教員が多く着任し、西宮への移転後のキャンパスのデザインにかかわっている)、文系科目しかありません。津田梅子は生物学を専攻しましたが、帰国後、生物学の研究を続けることはできませんでした。日本の女子大のカリキュラムは、なぜ、アメリカの女子大と同様のものを用意しなかったのか、興味の湧くところです。

またこのコラムで、進捗を報告させていただければと思います。

***コラムでは読者の方からの投稿もお待ちしております。**

金子昇・大東文化学園第5代理事長の回顧談
— 創設20周年に際し父兄会に感謝を捧ぐ(1982年) —

たにもと むねお
谷本 宗生(大東文化大学)

金子昇(大東文化学園第5代理事長)が、大学創立60周年(1983年)を控え、大東文化大学父兄会(現・大東文化大学青桐会)が創設(1961年)されてから20周年の節目に、次のような回顧談「創設二十周年に際し父兄会に感謝を捧ぐ」(『大東文化大学父兄会二十周年記念誌』1982年所収)を記していて、当時を物語る・たいへん興味深い証言と思われるので、以下に紹介しておこう。

金子 昇 「創設二十周年に際し父兄会に感謝を捧ぐ」

父兄会設置の話が登場したのは、昭和三十四年頃であったと記憶している。その主旨は、戦後の創痍未だ癒えず、深刻な経済不安と思想混乱の中に青年学生は方向を失し、過激的行動に身を投じて自己の不満を解消するか、又は酒色に耽溺して憂を晴らすかという、誠に憂慮すべき状態にあった為、学校側として父兄会を設置し、学校側と家庭の交流、親子の対話を計ると共に、一方では極度に経営困難に陥った財政の一部を援助して頂こうというものであった。

当時、大学は池袋に在り、千五百坪の狭い校地の中に老朽化した二階建て木造の校舎があり、学生数は四百名足らず、施設設備も皆無に近く、財政は窮乏して教職員の月給も滞ることが多く、正にどん底の景況であった。私が尾張真之介理事長の要請により学校に入ったのはその前年であったが、その頃は更にひどく、土屋学長、佐成謙太郎、水木惣太郎理事の間では大学を身売りする相談が行われ、磯谷老夫婦が悲嘆の余り号泣するという一幕もあった位である。さらに人事を巡って紛争が絶えず、恐らく大東史上最も悲惨な時代であったと思う。

このことを憂慮した卒業生の有志、知友関係者は連日連夜、学校に集まり、文字通り必死の努力を続けた。結局、昭和三十六年四月、北海道出身の南條徳男代議士が理事長に就任、翌七月、岸信介氏を中心とした後援会が結成され、広く政財界より建設資金の協力を求めることになり、漸く経営も軌道に乗った。然し、これとても容易に進んだわけでもなく、岸、南條両氏も屢々苦境に立ち、一時は自己の邸宅を担保に入れ、度々、手形の書き換えもやった。私はそのサインを貰い、銀行に行ったところ、重役が目を丸くして驚き、「岸、南條先生は大東の卒業生ですか」といわれたこともある。又、夏の炎天下、村田克巳教授と共に各会社を歴訪し、頭を下げながら寄付金募集に廻ったこともあるが、今にして想えば、全く隔世の感がある。

このような時、かねてから学校の再建に尽力して頂いていた下島儀貞氏の発案により、父兄会が設置された。下島初代会長は、曾て[旧]満州建業に尽力され、多大の功績を収めた人物で、剣道の達人としても高名であった。昭和三十六年九月、大学は、池袋より現在の板橋に進出したが、土地の取得や建設事業も容易でなく、財政も四苦八苦の状態であった。建設費の不拂のため、担当の飛鳥建設KKも一時工事を中止するなどのハプニングがあり、眠れぬ日が続いた。昭和三十七年、岡田創氏が二代目会長として敏腕を振り、校舎、講堂、研究室等の建設資金募集に奔走して頂き、地方支部開設の活動も開始された。この頃より、大学の学生も逐次増加し、板橋校舎に収容し切れなくなったので、東松山岩殿に校地を求め、逐次校舎群を建設した。特に多年の念願であった運動場が開発されたことは、大東始まって以来の成果であったと思う。この工事については、県、市、地元との交渉が難航し、又建築も困難を重ねた。地元の人々に対する説得については、農家に泊り込んで交渉を続けたこともある。

昭和四十三年、三代目会長鈴木鉄次郎氏は熱腸の士で、家業を放棄して父兄会の確立を計られた。又当時燎原の火の如く燃えさかった学生紛争事件に際しては、我々と連日協議しながらその鎮圧に奔走され、父兄側を代表し、親としての立場から学生の説得に当たられる等々、その苦闘は永く大東史上に留めるべ

きであろう。四代目松崎弥造会長時代も学生運動は息まず、大変な苦労をされた。続いて石河会長時代、鈴木会長時代となるが、五十周年事業を中心に、[婦恋]ゼミナールセンター開放、大東文化会館の設置の事業を完成し、多大の寄付援助と共に、学生の厚生補導等に尽力された。この両施設は、父兄会の協力がなければ不可能であったと思う。この頃より、大学は紛争の無い大学という評判がたち、受験生が急速に増大した。その後、高橋秀一、筋野勝三、高橋延雄氏等の名会長が次々と立たれ、大学の経営については全く一体となり尽力をされた。

昭和五十四年五月、第十代会長として田島敏男氏が就任されたが、この時期は大東にとって最大の難関であった。大学の急速な発展は、当然人事、財政面に支障をきたし、大東厚生社の紛争、神立事件、不正入学と称する一部過激派の思想闘争事件等々が相継いで勃発し、これがマスコミにとり上げられ、学内は騒然となった。この時、田島会長は父兄会を堅持し、終始一貫、心情を披瀝して真相を明示し、事件解決に奔走され、見事にこれを処理された。今、往時を回顧する時、会長[を]始め、役員、支部長、会員の皆様が、大東の真精神を信じ、冷静に事に当られたことが、この難問題を解決し得たのである。特に父兄に御心配をかけた所謂不正入学事件というのは、実際は補欠入学による寄付募金を歪曲してマスコミに流したもので、このことは法廷において大学側の正当が認められ、その資金によって現在十階建ての研究管理棟が見事に建設されたのである。

後援会や父兄会の設立当時の状況もたいへん興味深い。また、政界で有名であった岸信介や南條徳男らが本学関係者であるのか・・・と、金融関係者らから訝しがられるなどしながらも、金子昇や村田克巳をはじめとした当時の学園役員らが、熱心に寄付金募集に奔走した動向も注目できよう。時代ごとの危機に瀕して、大学・学園をしっかりと支えた裏方＝主要なサポーターの役割は重要であろう。

女子教育史散策・昭和戦時下編(89)

共立女子学園の場合5

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

『ニューズレター』第139号で、共立女子学園の昭和初期について述べた。引き続き、昭和戦時下の様子を『共立女子学園百年史』『共立女子学園百三十年史』などを参考に述べよう。

昭和6(1931)年9月18日、満州事変が勃発した。以降軍国主義の波が世の中を覆い始める。昭和12(1937)年7月7日、盧溝橋事件から日中戦争は全面戦争へと拡大した。翌13年4月1日、近衛内閣は「国家総動員法」(法律第五十五号)を成立させ、産業・経済を統制し、あらゆる人的、物質的資源を戦争に動員させる体制を作り上げた。徐々に戦争への協力が学校に対しても要望されるようになる。昭和16(1941)年4月、「国民学校令」が施行され、小学校は国民学校と改称された。同年12月8日、ついに太平洋戦争に突入した。

戦時への協力

満州事変後、全国の女学校で献金して陸軍に飛行機を献納する運動が起こった時、学園でも教職員・生徒から献出金を集めた。全国で3万4,000円余が集まり、昭和7(1932)年6月、埼玉県の新所沢飛行場で献納命名式が行われた。飛行機は「愛国三十号」(「愛国女学生号」の別名あり)と命名された。この式典に学園から永瀬教頭ら教職員・生徒代表数十名が参列した。⁽¹⁾

同年9月15日、日本政府は「日満議定書」を締結して満州国承認国となった。同月19日、満州国独立承認祝賀式に男女学生4万3,000人が皇居前広場に集められ、式典、旗行列が行われた。この時共立女子職業学校(以下、職業学校と表示)4年生が参列した。

これまでも学園では、生徒が自発的に慰問袋や下帯、防寒靴下、千人針などの手作り品を献納したり、献金したりしていた。また、陸軍被服本廠から東京府を経て、依頼があった軍需用品についても懸命に製作し、協力した。第1回は肩

章4,000個、患者襦袢630着、患者衣630着を、第2回は患者襦袢及び患者衣各2,890組を、共立女子高等女学校（以下、高女と表示）1年生を除く全生徒で真剣に作り上げ、巡視した東京府知事を感激させたという。⁽²⁾また、明治神宮体育大会や明治神宮奉拝式、聯合女子音楽体育大会など国民精神総動員⁽³⁾の計画にも参加してきた。

鳩山春子（昭和13年7月死去）は生前、同窓会誌『桜之友』第44号（昭和13年1月1日発行）の冒頭に「非常時局と婦人の覚悟」という一文を載せている。

大正八年、世界大戦が其の戈を戢めた時は、何人も地上は永久に平和な楽園と化するであらうと信じたのであります。併しそれは全く夢であることが漸くに明にされました。…所詮人類の世界には、何等かの形に於て戦ひの絶える日はありますまい。而して今後は単なる剣戟や砲弾のみの戦ひではなく、経済戦や外交戦や、又思想戦等と不可分の複雑な関係を為すものでありますから、それ丈私共女性の、銃後の尽忠報国的な領域は拡大された訳であります。

と、戦争への協力の必要性を述べている。（『共立女子学園百年史』416・417）

昭和15（1940）年4月、「国民精神総動員共立女子学園実行会」を学園内に作り、協力体制をとった。八条からなる規程の第三条には、毎朝始業前に「青少年学徒に賜りたる勅語」の奉読、ラジオ体操国民体操の励行や徒歩の慣行、会員家族中戦死者及び出征者に対する慰問など、具体的な17項目が織り込まれている。会員は共立女子学園各校専任教職員及び生徒で、会長は学校長、副会長は教頭とした。

また、九条からなる「御真影奉護ニ関スル規程」を設け、御真影は校長室内の奉安金庫に奉安され、学校長は毎月1回御真影に異状がないかどうか検査すること、御真影を護るため、当直員が奉安室を巡視することなどを定めた。

前掛学校から制服の学校へ

「和服に白の前掛」という姿が、明治時代から共立女子職業学校の特色であったが、昭和11(1936)年に高女が設立されるに伴い、高女と職業学校の制服がセーラー服に定められた。さらに15年、紺色で型折衿スーツの共立女子専門学校(以下、専門学校と表示)の制服が定められた。

当時の教員村瀬初代は「十年を顧みて」と題した感想文を、同窓会誌『桜之友』第48号(昭和17年1月発行)に寄せている。

…十年前は生徒は大部分が和服に前掛姿であつたのが今は揃ひの制服を着て或は明治神宮外苑に堂々たる分列式を行ひ或は大講堂のステージにコーラスの姿を見る時、昔卒業されし会員諸子に見せ度く思ふ。後略
(『共立女子学園百年史』450・451頁)

と、颯爽と行動する生徒たちの姿を誇らしげに綴っている。

勤労作業と学園農園

昭和13(1938)年6月、文部省は「集团的勤労作業運動実施ニ関スル件」を通牒した。当初は、夏季休暇中に3日～5日、農事・家事・清掃・修理・防空施設や軍用品に関する簡易な作業などを行うこととしたものであった。しかし、翌14年3月、中等学校以上に対し、休暇中だけでなく、随時行い、正課に準じて取り扱うことを指示した。さらに16年2月、「青少年学徒食糧飼料等増産運動実施要項」において、1年を通じて30日以内の日数は授業を廃して作業に当てることができ、その日数・時数は授業したものと認めるとした。

戦争の激化に伴い、農産物の供給不足が明らかになると、空き地を利用して食糧増産が奨励された。15年12月、高女は、東京府空地利用協会から北多摩郡小平村花小金井に2,703坪の畑地を借りて農園を設け、馬鈴薯、甘藷、麦、陸稻、野菜などを栽培し、担任教師の指導のもとに作業をした。職業学校は、杉並区成宗に鳩山一郎所有の土地2,450坪を借りて農園を設けた。小麦、馬鈴薯、甘藷など多数の収穫があり、食料不足の折からそれぞれ実費で各家庭に分

かち、大いに喜ばれた。17年には「空き地利用農産物展覧会」に出品し、高女・職業学校両園よりの出品農産物が成績佳良で入選した。

15年11月、紀元2600年の式典が宮城前広場で挙行政され、その後東京市が宮城外苑整備事業を計画した。学園はこの計画に進んで参加することになり、専門学校、高女、職業学校の上級生が土運びなどの作業に従事した。このほか明治神宮外苑の草取り、江戸川・田園調布方面の開墾、陸軍兵器廠・被服廠の仕事、近衛第一連隊の衣服修繕なども勤労奉仕として行った。

16年、専門学校の本科3年および専修科⁽⁴⁾の生徒は宮城外苑整備作業奉仕、本科2年は軍事後援会依嘱の軍隊用どてら120枚を作製した。高女4、5年生は6月、宮城外苑整備作業に、1、2、3年生は明治神宮外苑除草作業奉仕、9月22日より11日間、3、4、5年生480名は内閣印刷局に校正、発送、製版、製本等の作業奉仕、10月、軍事後援会依嘱の軍隊用下帯2万枚を作製した。職業学校の生徒は5月・7月に宮城外苑整備作業奉仕、10月には内閣印刷局に作業奉仕、軍事後援会依嘱の軍隊用下帯3万枚の作製を行った。

17年には、専門学校の生徒は凸版印刷、陸海軍省へ、高女の生徒は東洋乾電池製作所、宮城および神宮外苑、東京兵器補給廠、葛原製作所、日本製薬会社へ、職業学校の生徒は陸軍軍需品本廠、ライオン歯磨工場、日本証券印刷、陸軍省、神宮外苑等へ奉仕作業に出かけた。

このように工場への作業奉仕はもとより、裁縫を特色とする学園として、何万枚もの軍隊用品の縫製作業を担った。

報国団と報国隊

昭和16(1941)年8月、文部省の指示により、全国の諸学校において学校報国隊が結成された。学園では、専門学校、高女、職業学校を総合した組織作りをした。報国団として、総務部、国防部、鍛錬部、文化部、生活部、農園部を組織し、各部はさらに3~4班に組織された。例えば国防部は、イ、防空訓練班 ロ、防火訓練班 ハ、看護訓練班 ニ、炊爨^{すいさん}訓練班などである。

報国隊は鳩山薫校長を隊長として、本部は永瀬教頭、片山、武井、大野の三幹事、今村講師を以て組織し、

第一大隊(三個中隊):専門本科

第二大隊(四個中隊):家庭科

第三大隊(五個中隊):高女

第四大隊(四個中隊):職業

などとした。また、特技隊として、医療隊、消防防毒隊は各学校から約50名で第一～第三小隊を組んだ。警備隊は第一中隊(専門本科)、第二中隊(家庭科)、第三中隊(高女・職業上級)で組織され、その下に約50名の第一～第三・第四小隊が学年・組別に組織された。学校教練や勤労作業等へ出動するための組織であった。

同年11月、神宮外苑競技場において、陸軍傷病兵などを招いての運動会で、全員による報国隊分列行進などが行われた。17年5月には、高女全生徒850名による七里の強歩行軍を一人の落伍者もなく行った。専門学校国防部は学園の代表として、帝都国土防衛の防空訓練にたびたび参加した。同年10月、専門学校、高女、職業学校の三校合同の共立女子学園特設防護団が整い、職員・生徒一致協力して帝都国土防衛に万全を期して訓練を行った。一方、17年2月から報国団文化部において、毎週1、2回、洋画、日本画、長唄、謡曲、洋楽の5科目の課外授業を開始した。戦時下とはいえ、婦徳への情操教育も行った。

専門学校の修業年限の短縮

昭和16(1941)年10月16日に公布された勅令第九百二十四号に基づき、文部省は、「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ昭和十六年度臨時短縮ニ関スル件」を公布して、大学・専門学校・実業専門学校の修業年限を三カ月短縮し、17年3月卒業予定の者を、16年12月に卒業させることとした。これにより、当専門学校の16年度卒業式は12月27日に挙行された。続いて同年11月1日の文部省令第81号により、翌17年度は6カ月短縮して9月30日に卒業式を挙

行した。以後、毎年度臨時短縮に関する文部省令が公布され、19年度まで実施された。

繰り上げの対象となったのは、専門学校本科・別科⁽⁵⁾の生徒であった。このために毎週の授業時間数を5時間以上増加して修業年限の短縮を補い、また、繰り上げられた期間を修業期間とする補習科を設け、洋裁、手芸、袋物などを履修させた。本科と専修科の生徒の卒業後の無試験検定による中等学校教員免許状の授与はそのまま認められた。

学則改正

戦時教育体制への転換に伴い、昭和19(1944)年、専門学校、高女、職業学校の学科課程について学則改正することになり、同年4月の新学年の第一学年から適用することにした。

専門学校は、修業年限3カ年の育児科(1学年定員120名)・保健科(1学年定員240名)・被服科(1学年定員240名)の三コースを設けることになった。これにより、従来の本科・別科と家庭科は昭和20年度限り、専修科は昭和21年度限り、研究科は昭和22年度限り廃止することになった。

教育の目的は、「皇国ノ道ニ則リテ婦人ノ徳性ヲ涵養シ家政ニ関スル高等ナル学術技芸ヲ授ケ其ノ本務ヲ完ウセシムルヲ以テ目的トス」とし、「道義・体錬・修練」を三コースの共通科目とした。戦時下という時代を反映したものといえる。これによってこれまでカリキュラムの中心をなしていた学園の伝統である手芸(編物・刺繍・造花)は姿を消すことになった。

学徒勤労動員

昭和19(1944)年3月、「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」の閣議決定により、4月、文部省は「学徒勤労動員実施要領ニ関スル件」を指令した。これにより中等学校程度以上の学徒が、4月末から学校工場や軍需工場に動員されることになった。また、学校校舎は必要に応じて軍需工場とし、または軍

用非常倉庫、非常病院、避難住宅その他急の用途に転用されるなど、学校教育は決戦の体制に整えられた。

学園の屋上には東部第1951部隊、地階には東部123部隊が駐留し、寄宿舎には陸軍女子通信隊が寄宿した。さらに陸軍偕行社軍需部専属第四製縫所所属の学校工場が設けられ、学園の生徒を動員して外地派遣出征将校軍装品の製縫が行われた。

下の表は、昭和19年、当学園専門学校、高女、職業学校の生徒の学校工場及び外部工場等の動員先一覧である。

専門学校の部			
工場名	出勤の学年	出勤の生徒数	出勤始めの日
陸軍偕行社軍需部学校工場	本科3年	240	5月22日～6月2日
同上	専修科	122	6月24日～7月1日
東京第一陸軍造兵廠	本科3年	割当246	6月8日～6月10日
大日本紡績東京航空機	本科2年	割当240	7月1日
東京地方専売局足立工場	専修科	割当100 専修117 研究5	7月6日
陸軍偕行社軍需部学校工場	家庭科2年	割当240	8月1日
東京第一陸軍造兵廠	被服科1年	割当238	9月11日
東京陸軍兵器補給廠	家庭科1年	割当100	9月20日より通年
陸軍省恩賞課	育児科1年・保健科1年	216	9月18日～9月30日
同上	家庭科1年	111	10月2日
陸軍被服本廠	家庭科2年	割当100	8月1日

高等女学校の部			
工場名	出勤の学年	出勤の生徒数	出勤始めの日
第一海軍衣料廠	5年	167	7月12日
同上	4年	146	7月12日
芝浦電機株式会社鶴見支社	3年	141	8月28日

職業学校の部			
工場名	出勤の学年	出勤の生徒数	出勤始めの日
中島飛行機株式会社武蔵野製作所	1部4年	200	4月8日
東洋電機株式会社戸塚製作所	1部3年イ組・ロ組	100	8月18日
デーゼル自動車工業株式会社	1部3年ハ組・ニ組	100	8月18日
鶴見製作所			
有信精器工業株式会社	2部2年	50	8月15日
安全電機株式会社	2部1年	50	8月15日

※上の表は『共立女子学園百年史』480～482頁により作成した。

生徒勤労働員の様子を引率教員の記録から見てみよう。

昭和十九年六月中旬より九月下旬まで東京第一陸軍造兵廠に動員されました。毎朝早く全員が王子神社に集合、隊伍を組んで廠内に入り、数

棟に分かれて拳銃や三八式陸軍歩兵銃の薬莢の検査作業をしました。金属板から打抜かれた一片が順次工程を経て筒状に変わり、私どもの前に薬莢となり山積されます。これを肉眼でキズを探し出す作業でした。後略（専門学校本科生引率教員藤田信子記『共立女子学園百年史』486・487頁）

目黒不動前にある安全電気株式会社に行くようにということで、職業学校二部の生徒と一緒に動員されました。…仕事は電気製品（無線機か？）の組み立てで女子には向いた仕事ですが、細かいので神経を使って一所懸命でした。…五月三日に新しい生徒の入社式があり、上級生と一緒に働くことになりました。昼食は千葉（大根の干したもの）のたくさん入った雑炊で、大変まずいものでした。帰校日の割烹実習が、生徒は本当に嬉しそうでした。後略（職業学校二部二年引率教員蓮見幸子記『共立女子学園百年史』487頁）

昭和20（1945）年3月18日、政府は「決戦教育措置要綱」を閣議決定し、「国民学校初等科ヲ除キ、学校ニ於ケル授業ハ昭和二十年四月一日ヨリ昭和二十一年三月三十一日ニ至ル間、原則トシテ停止スル」こととした。しかし、20年8月15日終戦となり、以後廃止された。

20年3月10日の東京大空襲によって、多くの生徒が死亡し、また罹災し、授業どころではなくなっていた。職業学校では一部は2年以上、二部は1年から工場へ勤労働員されており、わずかに一部の1年生のみが登校し、工場化した校舎で軍服のボタンつけなどの作業に従事した。校舎内や講堂にも陸軍通信兵などが駐屯し、学校というような雰囲気は失われていた。

同年6月23日、沖縄が米軍に占領され、日本全土にわたり米軍B29による空襲が繰り返され、8月6日広島に、同月9日には長崎に原爆が投下され、政府はポツダム宣言を受諾し、8月15日の終戦となった。翌8月16日勤労働員は解除された。

終戦後

共立女子学園は幸いに校舎が被災を免れたので、職業学校と高女の授業は9月1日から再開した。専門学校は地方出身者が多かったため9月24日からの再開となった。

昭和22(1947)年3月、教育基本法が公布された。新制度により同年4月、共立女子中学校開校。翌23年4月、共立女子高等学校開校(普通科・家政科設置)。24年共立女子大学家政学部、別科(家庭生活科)発足。25年4月、共立女子大学短期大学部(家政科)発足。それぞれ旧制から新制度への移行は難産であったが、短期間に申請を繰り返し、認可され、現在に至っている。

注

- (1)『共立女子学園百三十年史』145頁
- (2)『共立女子学園百年史』414・415頁
- (3)日中戦争の激化により、政府が大成翼賛会や情報局を設立して生活や思想を統制するために行った軍国主義政策の一つ。昭和12(1937)年9月から行った。(ウィキペディア「国民精神総動員」より)
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E6%B0%91%E7%B2%BE%E7%A5%9E%E7%B7%8F%E5%8B%95%E5%93%A1>
- (4)昭和8年4月1日、共立女子専門学校の学則改正により「専攻科」の名称が「専修科」と変更された。(『共立女子学園百年史』359頁)
- (5)昭和8年4月1日、共立女子専門学校の学則改正により修業年限3カ年の別科が設置された。(『共立女子学園百年史』359頁)

参考文献

- 『学制百年史』、『学制百年史』資料編 文部省
『共立女子学園百年史』
『共立女子学園百三十年史』

進学案内書にみる戦前期東京の予備校(28):

『一目瞭然東京遊学学校案内』『一目瞭然東京遊学学校案内』

(大正 13 年)(大正 14 年)(大正 15 年)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(慶應義塾大学非常勤講師)

今号は、前号に引き続き大明堂書店より刊行された『一目瞭然東京遊学学校案内』を見ていく。前号までは 1922(大正 11)年版を見てきたが、今号は後の版で変わった点を見てくことにする。

すでに述べたように、『一目瞭然東京遊学学校案内』1923(大正 12)年から 1927(昭和 2)年まで毎年出され続ける。基本的に構成に変化はないが、記述には若干の違いが見られる。そこで、筆者の手元にある 1924(大正 13)年、1925(大正 14)年、1926(大正 15)年のものをもとに、1922(大正 11)年版で予備校に言及されている箇所、すなわち第二篇の「四、上の学校への足溜り―此が東京の味、予備校と其の活用―」、第三篇(1924(大正 13)年以降は第四篇)の「十五、外国語、国漢数、其他」、「十六、高等予備校と予備校」の記述内容を比較検討する。

まずは、「四、上の学校への足溜り―此が東京の味、予備校と其の活用―」であるが、後ろの学校名の一覧に掲げられたものが増えた点以外に変更はない。1926(大正 15)年版の記述を以下に示し、どの段階で加筆されたかを【】で示す。

―受験準備専門―

早稲田高等予備校(早稲田大学区内)

日本高等予備校(日本大学内)

高等予備校(専修大学内)

明治高等予備校(明治大学内)

東京高等予備校（法政大学内）

中央高等予備校（中央大学内）

大正高等予備校（錦城中学校内）

青山高等予備校（東京農業大学内）【1924（大正 13）年版以降】

日土講習会（東京工科学校内）【1924（大正 13）・1925（大正 14）年版では東京物理学校内】

其他

正則英語学校、同予備学校、国民英学会、普及英語学校、日進英語学校、開進数理学校【1926（大正 15）年版】、研修英語学校、研数学館、開成予備学校、其他略。

— 中学卒業程度の学力を目的とするもの —

開成予備学校、錦城予備学校、巣鴨中等夜学校、大成中等学校、赤坂中等夜学校、早稲田中等夜学校、麻布中等夜学校【開成、錦城以外は 1924（大正 13）年版以降】、府立第四、第六中等夜学校【1926（大正 15）年版】其他共に夜学

正則予備学校

正則英語学校 同一経営（午前午後夜学の三部）

大日本国民中学会高等予備校【1924（大正 13）年版以降】

夜間中学が増えているのが大きな変更点である。夜間中学への専検指定が始まっていない頃なので、一種の予備校という扱いを受けるということだろう。現に、1922（大正 11）年版でも「十六、高等予備校と予備校」に夜間中学が掲載されているが、受験準備のためのものではないので、本連載では検討の対象外としている。

学校篇では、1924（大正 13）年版以降は、電車の最寄駅の記載がなくなっている。また、学校名の直下から目的等の記載が始まる場合があるものが見られるようになるのだが、基準が不明確である。また、改行を避けたいのか、【】で

項目を示し、改行せずに情報を掲載する場合もあった。このような変化はあるが、予備校に関してはそれ以外に大きな変化はない。1922(大正 11)年版に掲載された情報が変化することは皆無に等しく、「ヶ」と「箇」が変わったり、「は」などの助詞が入ったり抜けたりするといった細かな字句の修正がある程度である。

変化として指摘しなければならないのは、第三篇(第四篇)の学校案内で、新たに加わったもの、そして掲載されなくなったものである。以下、「十五、外国語、国漢数、其他」、「十六、高等予備校と予備校」について、それぞれ見ていくことにする。

「十五、外国語、国漢数、其他」では、1924(大正 13)年版以降で、日進英語学校の「区分」で午前部に入門科が加わった。内容は夜間部のそれと全く同一である。また、同年版以降、欧文学院、英学専修学館、独逸学館は掲載されなくなった。

1926(大正 15)年版には、第一外国語学校が日進英語学校の後ろに、開進数理学校が研数学館の後ろに、新たに掲載された。以下にその記述を示す。

第一外国語学校(東京市本郷区金助町廿三、廿四番地)

目的 第一外国語たる英語及英文学を教授するを目的とす。

編制 受験科として英語受験科(午前) 高等受験科(午後) 英語受験科(夜間) 中等受験科(午前) の他高等程度のもので英文学科(夜間) 英語専科(午後及夜間) あり、女子も入学し得。

入学期 四月及九月、学力の程度によりて相当学科へ編入す。

開進数理学校(東京市神田区猿楽町)

目的 中学程度並に上級学校受験の為め数学を教授す。

学級 初等科、中等科、高等受験科に分ち、各科を毎月初めに新設して各三ヶ月を以て修業せしむ。

備考 英語科を附設す

「十六、高等予備校と予備校」では、1924（大正 13）年版から大日本国民中学会高等予備校が、錦城予備学校の後ろに新たに掲載された。以下にその記述を示す。

大日本国民中学会高等予備校（東京市麹町区飯田町暁星中学校内）短期間に於る中学高女の課程を履修せんとする者、並に高等の学校に入学せんとする者の予備教育。

編制 本科、受験科 A 及び受験科 B、各科一ヶ年、四月に始まる。

程度 本科は高等学校、専門学校の入学準備。受験科 A は中学、高女四年級の編入試験受験に適す、受験科 B は専検高検の受験に適す。【入学資格】特に設けず。

また、1924（大正 13）年版から校名のみを記した高等予備校が増えた。上述の 3 校に加えて、青山高等予備校（東京市外青山常盤松御料地、東京農業大学内）と文化高等予備校（市外下落合研心学園内）の 2 校が明治と中央の間に挟まる形で書かれている。ただし、東京農業大学のところを見ても青山高等予備校の記述はないし、研心学園はそもそも掲載されてすらいない。

予備校についても、正則予備学校に加えて、1924（大正 13）年版から日土講習会が校名に若干の情報とともに校名のみが掲載されるようになった。1924（大正 13）年版の記述を以下に示す。

日土講習会（藤森良蔵主宰、数学、国漢文考へ方講習、高校、専門校、受験準備）牛込区神楽町二丁目（東京物理学校内）にあり。

1926（大正 15）年版では、住所が「神田区錦町三丁目（東京工科学校内）」と変わっている。日土講習会は、『考へ方』という雑誌を創刊した藤森良蔵により

開設されたものだが、その名の通り土曜日と日曜日に講習会形式で開講された。常設の校舎を必要としないため、会場を移転したものと思われる。

これまで5年間にかけて刊行された4冊を検討したが、情報が驚くほど一致している。本当に変わっていないのなら問題はないのだが、さまざまな変更が反映されていない可能性も否定できない。特に第138号で取り上げている私立大学系の予備校は、この時期に廃校に追い込まれていくことになるが、それが正確に反映されているのかは疑問である。進学案内書の史料的制約と評するしかない。

次号からは、1924(大正13)年に刊行された『震災後の東京学校遊学案内 附・苦学生の就職案内』に掲載された予備校の情報を見ていく。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項 (2026年2月15日改訂)

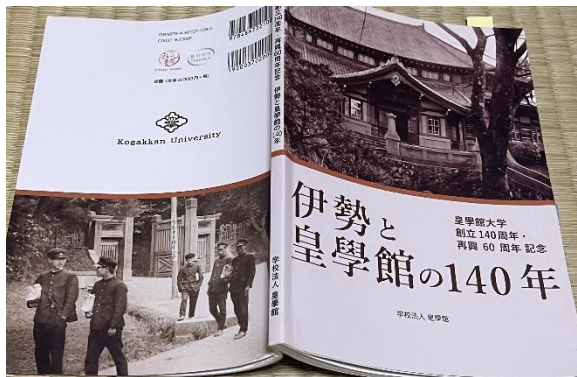
1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。
7. (著作権の許諾確認) 記事のなかで用いた写真画像などに著作権が生ずる際には、著作元または所蔵先に執筆者が許諾の確認を行ってください。それが大学等の出版刊行物ならば、当該大学の事務部または資料館等の施設に照会し、適切な対応をはかってください。確認がとれたものを用いることとして、確認がむずかしいものについては、写真画像の掲載を差し控える必要があります。
8. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
9. (レイアウト等) 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
10. (web公開) ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
11. (研究交流会) ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
12. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

d アニメストアで、2026年5月に公募していた応援したくなるような・愛せるおバカキャラ企画の結果が発表され、私・谷本も投稿していた、以下のキャラクターが幸いにも採用されました。『HIGHSPEED Étoile』第2話での輪堂凜(主人公)について、「デビュー戦で、周回遅れゆえ先頭にコースを譲るべきところ、ルールに加え相手レーサーなどを全く理解しておらず。おまけに、素直に譲らないばかりか、抜かれたと勘違いして逆上しリボルバーストで先頭のキングを抜き返してしまう始末。デビュー戦でいきなりの失格!というやらかした感は満載だけど愛嬌でなんだか憎めない…そして、あの絶対王者のキングに一泡吹かせてみせた、次世代レーサーとしての資質や可能性を十分に予感させた存在感。主人公がデビュー戦をルール違反で失格というのも、やはり愛すべきおバカキャラとしてお約束かな。以後のレースも、勝負の世界は甘くはないかと。でも、我らが主人公・輪堂凜は結果を引きずらず明るい。デビュー戦のリベンジを結果で見せてくれるのも主人公のお約束だから。輪堂凜の成長を自然と応援したくなるはずだ」(投稿コメント)と。(谷本)

伊勢市の皇學館大学で8月に開催された全国大学史資料協議会に参加した際、会場で販売されていた『伊勢と皇學館の140年』(皇學館大学、2022年)を入手した。本書は皇學館大学創立140周年・再興60周年記念展示「伊勢と皇學館の140年」に準拠して作成された本で、豊富な写真を見ながら皇學館大学の歴史が概観できるようになっている。また、同大学教員による「駅伝と皇學館」「吉田茂と皇學館のゆかり」「幕末・明治初年の朝彦親王」などの史料を駆使した12のコラムが盛り込まれているのが本書の特徴になっている。そうしたコラムの一つの「皇學館の学生寮史」(執筆者は高野裕基氏と長谷川怜氏)に引き込まれた。コラムでありながら6頁にわたる力作で、明治20年代から現代にわたって、皇學館における寄宿舍の変遷が記録されている。特に印象に残ったのは、明治41年(1908年)2月11日の「自治宣誓式」と、戦後に廃学された後の再興運動において、昭和36年(1961年)に設立準備委員会が全寮制を答申したこと(実際には予算面などで全寮制は実現しなかったようだ)だ。皇學館においても、寄宿舍が教育面で重要視され、旧制第一高等学校のような「自治制」や皆寄宿舍制が目指されていたことをうかがうことができる。皇學館を再訪して寄宿舍関係の史料をじっくり閲覧したくなった。(富岡)



先日、歳相応の疲れを感じてか、ネット通販にてリカバリー（機能性）シューズを、自分の懐具合からして少し高額でしたが、頑張って購入しました。ただ早速使用してみると、かなり体調の疲労感が軽減されているように実感しましたね。自身の歳といえ、また先日、「ねんきん定期便」（年金加入記録のお知らせ）が大学のジム窓口を介して送られてきました。老齢厚生年金は、65歳になる3カ月前に、年金請求書を送付するよし。ただし、年金受給を75歳まで遅らせた場合、84%増となる見込みという。逆に60歳に繰り上げて早く受給した場合は、1カ月あたり0.4%、最大で24%減額となるそうです。いずれにせよ、いったん請求した年金受給の申請は、生涯変わることなく取り消すことができない…といえます。おまけに、年金の受取り見込み額がリアルに記されていて、ちょっとどう？なんかなどやるせなく感じてしまいました。そもそも豊かなセカンド・ライフをおくるには、いったいいくら？必要といえるのか、老後はうん千万円！とか噂されますが、私よりも若いNL同人諸氏がしっかり余裕を有しているのであれば、これはなんら心配無用な話でしたかね。（谷本）

松本の旧制高等学校記念館夏期教育セミナーに参加しました。今年は校歌がテーマでした。校歌、寮歌、学生歌などは、興味深い研究テーマがありますね。そういえば、以前、早稲田大学の学生歌である「早稲田の栄光」を作词された岩崎巖氏のお話を聞く機会がありました。岩崎氏は、「陸軍予備士官学校に入る前、『早稲田に二度と戻れない、最後に早稲田の見納めをしよう』と、大学に隣接する球場の照明灯の鉄塔によじ登り、台座の板に自分の名前を書いたこと」を語っておられました。作词者の歌詞に込めた思いなどを理解することは大事であると思いました。（山本剛）

山本さんも書いていらっしゃるように、今年の夏期教育セミナーも非常に興味深かったです。そして、若手研究者の皆さんが今年もリピーターとして参加したり、新たに大学院生が参加したりということが特に嬉しかったです。

最近10年間はどの夏期教育セミナーでは、旧制高校を手がかりにしながらも、教育に関する様々なテーマが工夫されて設定され、講演と特別イベント（事例や体験談の紹介）の1日目と、研究発表会の2日目が密に関連づけられることによって、2日間にわたって理解が深まる構成になっています。1日目夜の交流会も含めて、研究をともなった交流行事として、今後も継続・発展していったらいいな、と心から願います。そのために企画面でのボランティアを続けていきたいと思います。

前号で少しお知らせしました京大吉田寮の文化財登録を求める市民の会の署名活動に数週間で200名以上の方にご協力いただきました。本当にありがとうございます。署名は9月の一次集約後も少なくとも10月ぐらまで続きますので、もしご関心がありましたらご検討をお願いします。詳細は、「吉田寮の建築文化財登録をめざす市民の会」ホームページをご覧ください< <https://konoe.localinfo.jp/>>。(福岡)

本ニューズレターのPDFファイルをダウンロードし、Adobe Reader 等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」で印刷すれば、A5 サイズの小冊子を作ることができます。